

イネもみ枯細菌病の収量に及ぼす影響

十河和博・都崎芳久

1977 年にイネもみ枯細菌病が多発生した圃場から発病程度別にイネを採取し、本病の発生が収量構成要素及び収量に及ぼす影響について調査した。

1. もみ枯細菌病の発生によって、収量構成要素のうち稔実歩合と登熟歩合が大きく低下し、その結果、収量は著しく減収した。
2. 発病穂(籾)率と減収率との間には 0.1%の危険率で有意な相関関係を認めた。病穂率及び病籾率からの減収率(Y)推定の式は、 $Y=0.567X_1$ (出穂 25 日後の病穂率)－1.459、 $Y=0.735X_2$ (出穂 25 日後の病籾率)－0.221、 $Y=0.732X_3$ (出穂 50 日後の病籾率)－2.616 であった。
3. 発病程度と穂数及び籾数との間には関連性がみられなかった。
4. 発病程度が高くなるにつれて精玄米千粒重は増加する傾向がみられ、病籾率と精玄米千粒重との間には 5%の危険率で有意性が認められた。
5. 精玄米の選別に用いた 1.7 mmの立目ふるいでは、本病原細菌によって生じた変色米が多く含まれていた。現在、玄米の選別に用いられている立型米選機やライスグレーダも選別方法は立目ふるいと同じであるから、精玄米に変色米が混入されることになり、玄米の品質を低下させるものと考えられる。
6. 減収率の推定には病穂率からでもほぼ満足のいく推定値が得られるものと思われる。